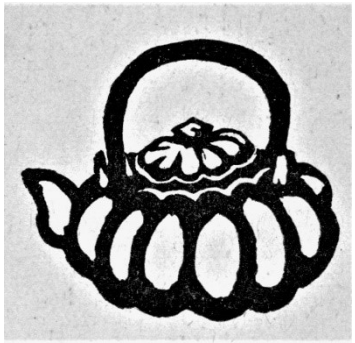

その二

家

私は仙台へ出て来ると、仕事の相棒のいる家に一時宿を割り込ませてもらった。その家は私の相棒が大将株で、その弟の大学生、従弟に当る高校生とその弟の医専受験生の四人が一軒を借りて住んでいた。飯は近所の料理自慢の内儀が好意で作って、そこの婆やに届けさせてくれた。風呂もその婆やがわざわざこの家の湯殿に出張して来て、わかして行ってくれた。

飯が来ると大学生の陣取っている奥の間に膳を並べて一同座についた。食べる前に皆は膳の内容を覗くようにしながら、両手を挙げて一斉に、

「イオッ」

と言う喊声（かんせい）を挙げて箸をとった。私は始め一寸驚いたが、忽ちこの愉快な喊声に馴染んで、私も負けないような大声を立てた。この喊声を挙げると、食べ物にありついて興奮する動物のような、極めて原始的な食欲の逞しさが起って来て、浅間しいほどに膳の上を平げつくした。食い終って膳を片付けるとたちまち今の食物の結果と思われるような放屁をする者もあった。それも態（わざ）と力んで、音高く鳴らして喜んだ。

健康な若い者共がこうして余り生活の屈託もなく集まって暮らしていると、勢い非常に笑い

好きになって来るものらしい。彼等ほどの笑い上戸はなかったと、私は今でも思っている。食後に一人が放屁すると他の者共は

「やりおったな、やりおったな」

と顔をしかめながら笑い出す。それから話が始まって、あそこの爺いが何(ど)うのと言っては笑い、あそこの婆が彼(こ)うのと言っては笑い、慌てて便所へ駆け込んだが猿股の紐が解けなかったと言っては笑った。ことに彼等は私の話を面白そうに聴いた。私は得意になって、江戸小咄をきかせた。

――コレ、兩國へとんだ輕業が出た。一本竹の曲は妙だ「ナニ、あの位の事は一本竹でも横に足がかりはあるヮ、おれがひとつ、して見せう。これがほんの一本竹だと、太い物干竿をおったて、つるつるとのぼる。これは奇妙だ奇妙だ「もっとはやく登ってみせうか、とつるッとのぼり、つるッと降りる「イヤもう妙々「もっとはやくか、とつるつるつると登り、ツツと降りて竹のもとにしやがんでいる。コレは妙だといえど黙ってゐる。どうしたことと、あおむいて見れば、竿のうらに、きんたまがぶらり。――

こんな話をすると、彼等は、

「ワアッ」

と爆発して、あとは苦しそうにヒイヒイ言いながら涙を流して笑った。私はこれ等を小咄のつもりで話したのであったが、彼等は私自身が何かそういう奇想な下げを故意に作って話しているように思っていたらしかった。しまいには、私が膝をのり出して話を始めると、彼等は「ホレホレ」と言って、ニヤニヤしながら警戒して顔を見合わせるようになった。私の話がすべてそういう風にとられるのは、やや迷惑だった。しかし、話の効果から言うとなかなか愉快でも

あった。

彼等との生活はなかなか愉快ではあったが、私は無理に割り込ませて貰っていたので何時までも其処にいるわけには行かなかった。仕事の合間に、暇さえあれば仙台の町中を歩いて回った。いい宿がなかなかなかった。

数日経った頃、その家の裏の黒い塀の向う側の隣屋敷に真新しい家が出来て、棟上の祝があった。此方から眺めていると、新築の屋根に登って餅をまいていた中年の元気な内儀が、

「隣の書生さんにも、ホラッ」

と、餅を三ツ四ツ放ってよこした。灯台下暗しというのか、その時になってこの隣屋敷の中に小さい家が沢山あることを知って、その貸家の中で空いたのがあれば、私に都合のいいのがあるかも知れないと判った。

その屋敷は半町四方くらいの狭いところに、平屋ばかりでしかも大抵が一戸建ての独立した家で、二十六軒ばかり借家があった。地面の割り当てなどから言えば一戸建てばかりだと、随分不経済であるが、この屋敷の大部分の貸家が六畳に四畳半ぐらいの小さい家で、貧しい月給取りなどには実に手頃なところから、何時もあまり長く空き家になっていることはなかった。考えようによっては、これは案外利口な大家の考えであったかも知れない。

その時新築の家が出来て借主の移動が起ったのか、間もなくこの屋敷の一番奥のどんづまりのところに空き家が出来て、その家に私が住むことになった。広さは四畳半に三畳の二間（ま）、押入れが一つ。勝手には東京と違ってガスも水道もなかった。仙台にガスがないと言うわけではなかったが、一般の住民は余りその恩恵を知らなかった。流しの水の落ちる下は「吸い込み」と称して、少しばかり地面を掘って、それへ流した水を吸い込ませる極めて原始的な下水装置

になっていた。庭は二坪ばかり家の前にあった。その隅に細い杉の木が一本植わっていた。家の向きは東向きで、南は大家の物置、北は隣の家でふさがっていた。西は壁で、僅かに四畳半の方の部屋の壁の上方が一尺幅に天井に沿って硝子の明り窓が作ってあった。家の中は朝早くほんの少しばかり陽が当った。西の方の明り取りからは、大分陽が西に傾いてからその窓に陽が当るので、光線は牢屋のように部屋の上の方を照らして畳の上までは来なかった。その頃には三畳の方はもう真っ暗になっていた。こんな暗い家に終日坐っているとだんだん気が滅入って来て、終には自分が暗い穴蔵にでも住んで眼を光らせている怪しげな生き物か何かのような気持になった。

この住居に段々と冬が近付いて来た。十二月から雪が降り始め、次第にその降った雪が解けないままに残った。狭い庭は積もった雪と屋根から下した雪とでうず高く山が出来た。不思議なことに今まで暗かった家の中が、その雪の白さでぽうと明るくなった。私は急造りの煉瓦ストーブの焦れったい煖気に、どてら姿で向かいながら、冬になると明るくなる家の中を感心しながら眺め回した。北国の家は、矢張り雪が降って見ないと判らないものだと思った。しかし家造りがいやに隙間だらけなのはどうしたことなのだろう。これは一寸解せなかった。私はあんかや炬燵が嫌いだったので、ストーブで部屋そのものを暖かくしたかった。私は隙間をいちいち丁寧に紙で貼った。押入れの中からしてその必要があった。非道いことには、座敷の壁の上の方に、雨が吹き込みそうな口を開いているところもあった。障子は開(あ)け閉(た)てするので、その隙間を埋めるのは少し工夫が要った。こうして眼張りをすると、部屋の暖かさが違って来て、ややしのぎよくなった。困ったのは、練炭に火をつけるのが容易でないことだった。先ず炭火を起すことから掛からなければならない。夜おそく他所から帰って来て、道具を庭の雪の上へ

持ちだして、半時間もつきの悪い練炭を相手にバタバタやるのは腹の立つことだった。それでも火がつけばいい。下手をすると、折角おこした炭火の方が燃えきってしまう。時には私は癇癪をおこして、道具を雪の上へ放り出したまま、近所の遅じまいの飲食店へ出掛けて行って酒を飲んだ。その勢いで帰って来て、布団にもぐって寝てしまうのだった。翌朝になって、夜のうちに降った雪の下から昨夜放り出して行った道具を掘り出す時には、矢張り酒の智慧の始末のなさけなさを思わずにはいられないのだった。

はじめて過ごした北国の冬は、寒さが非常に応えた。この家にいれば勿論、知人のとこを訪ねても、町の喫茶店へ行っても、何処でも暖房が行きとどかない寒さが室内にあって、何時も身体がかじかんでいるような気持がしていた。寒さに自然と肩が丸くなる気持ち、そして冬中、雪と共に解けないでいる気持ちであった。

二月頃、一寸用があって静岡県まで帰ったことがあった。その戻りに、熱海を過ぎながら列車の窓から眺めていると、梅の花の咲いている間を、島田にゆった若い女が二人連立って、羽織もなしに帯付の姿で歩いているのが眼に映った。それが東北線にはいって、白河あたりまで来ると、あたりは真っ白に変わって、鉄道の沿線は山も野も白一色に塗り埋められてしまっていた。野の末に立っているポプラの木立まで白髪のようになっていた。黒いものと言えば、雪の中に何をほじっているのか判らないが点々としている烏か、着膨れがしてのそのそとしている人間くらいのものだった。空は大地の白さを埋め合わすかのように泥色に暗く低く垂れて、上から押さえつけているようであった。泥色の空と白い山のかげの合間から、あの甲高い細い声の追分が、もの悲しい調子できこえて来たとしたら、さぞこの景色に相応しいものだったろう。その白い中を走って抜けて、やがて仙台へ行くのは、ますます雪の中へはいって行くよう

な気持だった。

戻った当座の数日の間は、暇だったので、根雪の反射の白々と照らしている部屋の中で、寝床に入ったまま、北極探検の記録を読み耽った。北極探検記は寒さの身にしみる記録だった。仙台あたりの人間に言わせたら、東北の仙台に来たからと言って北極を偲ぶとは馬鹿げているほど大袈裟だと言うかも知れないが、暖かい故郷からはるばると雪ばかりのさ中へやって来た気持ちの抜けないその時の数日間は、探検記の中にある氷のギシギシいう極地に、孤独な探検者がスリーピングバッグの中にはいって眠る情景が、そのまま身にこたえてきた。障子に映る根雪の反射をオーロラにたとえ、ストーブの火が消えて冷たくなってきた布団をスリーピングバッグになぞらえたとて、その時の私の気持ちとしては何の誇張もなかった。

ようやく冬が過ぎた。寒さからは解放されたが、雪が消えると共に再び家の中は暗くなった。私の憂鬱は消えなかった。こんな家でこれから先何年も暮すかと思うと気が沈んだ。それに冬になる前に、これだけはと思って遮二無二（しゃにむに）買い込んだピアノがあったので、引越すことにしても、これを持ち出すとなると実に厄介になる。下宿では到底駄目だし、一軒家というと結局今いるこんな家ぐらいがおちになる。引越したって仕様がないと思ったので、私は色々考えた末に、西側に明かり窓がある天井近くまで一杯にふさがっている壁が何とか出来ると思いついた。

引越しが出来ない以上は大家にこの家を改造させよう。或る晩私は大家へ行って主人に、「どうも座敷が暗くて仕様がないが、あの西側の壁を半分、三尺に四尺位切って、開け閉て出来る硝子窓を作ったら、あの座敷は見違えるようになるが何うだろう、」と相談した。

「陽が当る当らないと言いますが、貴方」

と、主人は晩酌に酔った口をとんがらせて、

「朝は随分とよく陽が当りますぞ。貴方は朝寝坊だから、よく御存じありませんが。」

東向きの私の家は朝日が当るが、それも丁度東寄りの南隣りに大家自身の家があって、それがこの屋敷内で唯一の二階を作っているものだから、朝陽はこの二階家に遮られてしまうのだ。私としてはたいして有難くもなかった。主人はブツブツ言っていたが、内儀が傍から口を添えてくれて、結局「ようがす」ということになった。

二、三日すると、私の留守に出入の大工がやって来て窓を作った。私が外出して帰って来てみると、もう硝子もはまってちゃんと出来上がっていた。その結果は、採光の点では案外成功しなかった。窓から一尺もない鼻先に隣屋敷の何か家があって、窓の下半分は暗くてどうにもならなかった。しかしここに窓があるということだけでも今までのように壁でふさがっているのとは違って、息抜きのゆとりが出来た。私はやや安堵して、机をこの窓に向って据えた。改まった気持ちになって机に向ってその頃愛読していた「宇治拾遺物語」をペラペラとめくったりして見た。

ところが、それから三十分もたったと思う頃、突然隣屋敷の方でバタバタ駆けて来る音がした。足音は近付いて来て私のこの新しい窓の先にある家の中へバタンと駆け込むと、たちまち激しい勢いで小便をする音がした。窓の前の家は便所だった。これは困ったことになったと思っているうちに、また一人やって来た。便所の処の悪さも程度による。これは余りと言えば近すぎる。近いどころではない。その音が余りにも手にとるように克明すぎて、私は自分のこの顔にじかにその飛沫を浴びたかのように感じて、思わずたじろいだ。それからあとは、丁度夕暮時になったためか、引きりなしに客が輻輳(ふくそう)した。人数も五人や十人ではないところを見ると共同便所らしい。私はがっかりするどころではない、たとえようもなく悲しく苛立った気持ち

になって、座敷の中をせかせかと歩いた。便所の音は薄い硝子窓を通して入って来て、この座敷中を遠慮会釈もなく駆け巡って、どの隅にいても耳をふさがずにはいられなかった。大家がこれを知ったら何と言うだろう。この窓、この窓！私は窓を睨みつけて、思わず「畜生！」と叫んだ。

それから数日経った頃の或る夜、夜中に私はその便所で非道い下痢をする音がして、眼をさまされた。私自身も下痢性で、下痢の痛苦を人一倍知っていたから、深夜にこの身を絞るような音を耳にしたときは、思わず布団をはねて起き上がった。私は電気をつけて暫くのあいだ私がさいなまれているような気持になって、じっと坐っていた。こうしてこの窓はそのまま開かずの窓になってしまった。

それから数カ月の間、隣に物音がすると慌てて鼻をかんだり、庭先に立ったりした。部屋にいる間は何時もこの窓に背を向けたいような気持ちで、私はそこが壁である時よりもはるかに部屋に坐りにくくなった。事実これでは堪らなかった。しかしその、いつもこの窓から遠ざかりたい気持ちと、堪らないからどうにかしなければならないと思うのとにせき立てられて、私はまた一つの工夫を考え出した。

私自身が窓から遠ざかろうとしたって仕様がないから、いっそのことこの窓を隣から遠ざけたらどうだ。元来この家が東向きだというのが不思議だ。この家を南向きにすれば、大家の二階の西側から、南の光が採れる。幸い前に二坪ばかりの庭がある。同じ屋敷の北隣りの家にも私の家に接して庭があるらしいから、その余裕でこの家を持ち上げてぐるっと回したら回せないことはないだろう。こう思いつくと私は早速大家に行って話をもちかけた。これは先の窓を作る話のように簡単には行きそうにもなかったので、私は大家に向って、まあ、私の我儘のよ

うに見えるが、私が現在不服を抱くというのは言わば入る人が誰でも不服を抱くということになり、それでは結局大家さんの損になる。と利害を大家自身に持って行きながら、ここをこうして、こうすれば家が南向きになると説いた。大分難色があったので、一度にすすめない方が良いと思ってその時はそれだけで引き揚げた。ところが私の帰った後で大家夫婦の間にどういう相談が出来たのか、翌日二人は巻尺を持って私の庭へやってきて、あっちこっち色々と測って見ながら、

「そうですなあ：：そうですなあ：：」といちいち頷いていた。私は縁側に立って、黙って笑いながら見ていた。大家はうなずきうなずき測り終えると帰って行ったが、話はそれで決まってしまったのであった

　数日後に、朝早く五六人の仕事師がガヤガヤ言いながらやって来た。彼等は寄ってたかって、家の廂や廊下や勝手などを取ってしまった。この小さな家は、そんな付属物があればこそ何やら家らしく横に張っていられたのだが、それを取ってしまうと、いやにほっそりとして障子や壁をむき出しにしたところが、まるで芝居の大道具のように作りもののようになってしまった。彼等は家の下へきりんを入れて土台を持上げた。家はぐらぐらしながら浮き上がった。私は慌てて、頭株らしいのに向って言った。

「ピアノがあるんですが」

「ピアノ？百貫もありすか？」

「いやそうは、しかし六十貫はあるでしょう」

「大丈夫。えがす、えがす」

　と彼は事もなげに頭をふった。家を持ち上げた下へ、車をところどろろにはめて、そのレー

ルに当たる鉄の溝を前の方へ弧を描いて敷いた。その日の仕事はそれで終えて彼等は帰って行った。陽が沈んで、夕焼の後の青く澄んだ空が、暗くなる前のひと時の私の家の背景となった。家は電気の黄ばんだ光が障子に映って、前後の照明がまるで舞台のようであった。私は障子のすぐ前に履物をぬいで上がった。夏だったので、こんなにむき出しにされても、かえって爽々しいくらいだった。私はこの家に寝るのがとても愉快だった。いい気持ちになっておそくまで床の中で本を読んだ。夜中に通り雨がやってきて、パラパラと障子を濡らした。しかし心配する程ではなかった。

「えーんやこうら」

家がぐらぐら動いた。私は吃驚して眼が覚めた。もう戸外は明るかった。何時の間にか仕事師達はもう家を動かし始めた。昨日の頭株の男が何か叫んでいる。私の寝ている頭のそばの障子の近くを誰かが飛んで通った。私が障子を開けて顔を出すと、頭株の男は手を振った。

「寝てさい。寝てさい」

寝ていたままの格好で飛び出すのも一寸困ったので、私は再び床の中にもぐり込んだ。

「えーんやらこうらあ」

壁がみしみしいって電気が激しく揺れた。私はピアノの下にいたので、家が地震のように揺れてピアノがぐらぐらすると、慌ててまた跳ね起きた。私はそのままピアノを両手で支えて立っていた。家は間もなく目的の半分ぐらい回った。

「えーんやこらあ」

細い柱が、掛声かけて動かす度に右へ傾いたり左へ傾いたりした。壁の隅がくずれて落ちて、私の苦心の防寒の眼張りがみんな破れてしまった。しかしこの小さな家は、今にもこわれそう

な揺れ方をしても、障子が外れる程のゆがみもせずに見かけによらず案外丈夫だった。
それから数度の掛声で、すっかり目的の方向に回り終えた。家の中はすっかり見違えるように明るくなった。私は急いで着物を引っかけて障子を開けた。家の前には、大家をはじめ、朝だというのに近所の人々や子供達が大勢きて見物していた。
私は回り舞台から現れる役者のような具合に一寸照れながら、その見物人達がワイワイ言っている前へ、着物の前を合わせながら出て行った。振り返って見ると、辺りの有様はすっかり変わってしまった。家は前の位置のような奥へすっこんでいる様子がなくなって、ゆとりのある空間の真中に出て、家中が何か透き通るような明るさが出て来た。私は今度こそは成功だと思って満足だった。
家が向き直ると、縁の下の支えを外して、ひずみを直して土台を入れ、大工がやって来て勝手や廊下を作った。玄関は改めて北側に出来た。隣屋敷の便所からはこれで完全に離れることが出来た。家の中はすばらしく明るくなった。私は眼張りを仕直した。
共同便所の傍らには、今度は三畳の部屋の横が当った。私はその板壁に大家の子供達の描いた無邪気なクレイヨン画を数枚はり付けて飾った。これは偶然の思い付きだったが、はからずも鬼門に貼る護符の役目をした。太陽が昇って植木鉢に陽が当っている絵だとか、雨の日に赤や青のマントを被って学校に通う小学生の絵の中にはあやめが沢山あって、その上に、
――こうらくす、こうらくす、ぷれけけす――
とあり、多分このあやめの池に蛙が啼いているところを描いたのだろうその絵は、私の部屋の何の飾のないなかにあっては、これだけでも非常な潤いだった。
私はその後も、何か一寸した病気をして独りでじっと床についている時、寝床の中からこれ

等の絵を眺めていると、童心の持つ深い魅力のためか、普通の絵からは感じられないような暖かさと楽しさが胸に湧いてきた。

廊下とお勝手は真新しい木で出来上がったが、これは間もなく非道くよごれて来た。何でも最初は、雨の日に裏口から入って来て、下駄を外におくわけにいかず、と言ってその雫のたれる下駄を持って座敷を通ることもいやだったので、一時のつもりで下駄を廊下の隅へおいた。この箇所は当然汚くなった。それから始まった。

その次に裏から帰って来た時に、廊下のその汚れた箇所へ直かに足をあげてどっこいしょと上がり込んだ。それが度重なって習慣になって来ると、段々その汚れが広がって、終には廊下全体を下駄ばきでゴトゴト歩き回るようになった。廊下は土間と同じになって、障子のすぐ前に下駄をぬいで座敷にはいるようになった。廊下と同じ板敷きで出来ている勝手も、その類似から結局同じ運命になった。のみならず、この勢いが次第に座敷へも侵入してきて、座敷は新聞、鼻紙、菓子の包の空き殻、空き丼、ひっくり返った灰皿などが、足の踏み場もない程一杯に散らかって、畳の上は何処もここも爪先立って歩かなければならないくらい汚くなってきた。満足に素足で立入ることが出来るのはピアノの前にある万年床だけになった。柱にかけてある箒が役に立つのも、布団の上を掃く時だけになった。こうして結局万年床の布団が唯一の座敷になり、座敷は板の間になり、板の間は土の間になった。これでは悪戯(ふざけ)た意味の秩序こそ立っているが、暮して行く上には、ただもう汚いばかりでどうにも仕様がなかった。

これがその後、仕様がない仕様がないで到頭二年半も続いて、最後に私がどうもすれば仙台に土着しそうになるのを振り払うようにして思い切って東京に出てくるまでそのまま続いた。この家の汚れて来た経過を考えると、まるで何かの悪徳に染まる経過に似たところがあると思

う。似たどころか、家を汚すのは、これも悪徳そのものであるにちがいない。確かに悪いことだ。大家も私の立去った後を見て、つくづく、独り者に家を貸すものではないという手痛い教訓を得たことであろう。大家には全く気の毒なことをしたと思うのである。

【新風土（小山書店）　昭和十四年六月号】

73頁　輻輳……混み合うこと

75頁　きりん…建築用のジャッキ